

## 6. トピック④ 本学のダイバーシティ受け入れ体制の現状

早稲田大学では、国籍・性別（男女に限らない多様な性）・障がいの有無などにかかわらず、多様な「人々」が共存できるアカデミック・コミュニティづくりを進めています。そこで、学生自身の経験や本学の受け入れ体制についてみましょう。まず、「あなたは国籍、言語、性のあり方（ジェンダー・セクシュアリティ）、障がいなどで、自身が悩んだ経験がありますか」への回答をみます。図24（左）のように、全体では14%が「当事者として悩んだ経験がある」、7%が「周囲が悩んでいるのをサポートした経験がある」としています。また、「学内で起きた問題について実際に見聞きしたこと、もしくは遭遇したことはありますか」という問いでは、図24（右）のように、全体では「見聞きしたことがある」17%、「実際に当事者として遭遇したことがある」3.9%、「周囲が悩んでいるのをサポートした経験がある」3%と、全体の4分の1がなんらかの経験を報告しています。その内容は、「性に関すること」57%、「国籍、人権に関すること」37%、「言語に関すること」30%、「障がいに関すること」21%となっています。

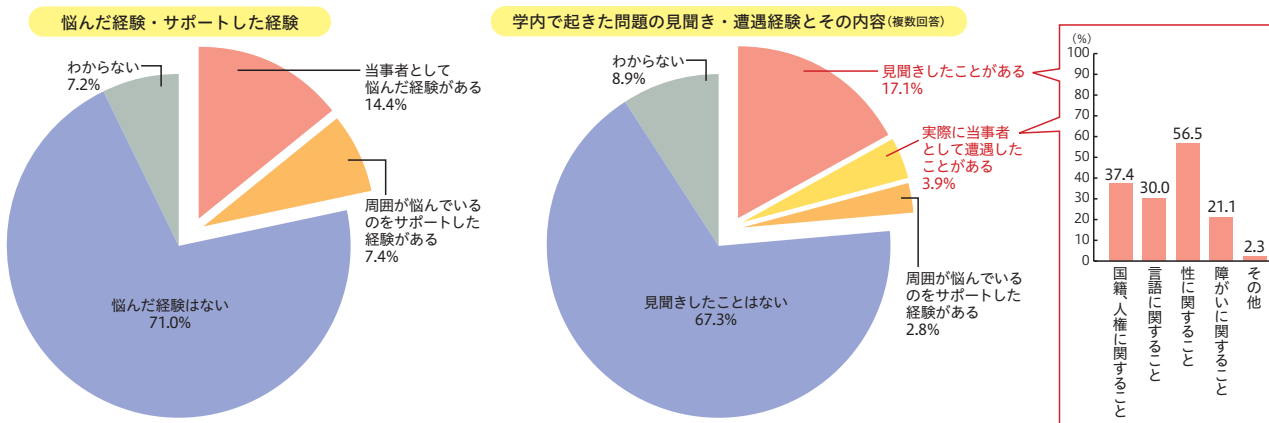


図24 属性や特性をめぐる悩み・困難に関する経験

最後に、本学の体制についての評価をみます。「あなたは、現在の早稲田大学は学生のダイバーシティ（多様性）を受け入れる体制が整っていると思いますか」への回答は、全体では「十分整っていると思う」20%、「どちらかといえば整っていると思う」57%と、肯定的評価が大勢を占めています（図25）。他方で、9%が「わからない」とするなど、体制自体の周知は必ずしも高くないようです。また大学院・学年別では、全体に文系・理系とも、高学年ほど肯定的評価の比率が低くなっています。これを、悩んだ経験（サポートを含む）の有無、問題の見聞経験の有無別にみると、いずれも経験があるグループでは「どちらかといえば整っていないと思う」「整っていないと思う」の評価が合わせて20%を超えています。とくに問題の見聞経験のあるグループでは、4分の1を占めています。本学のダイバーシティへの取り組みは、スタートしたばかりです。具体的な問題への対応や当事者の学生たちの声を参考にして、今後推進していかねばなりません。

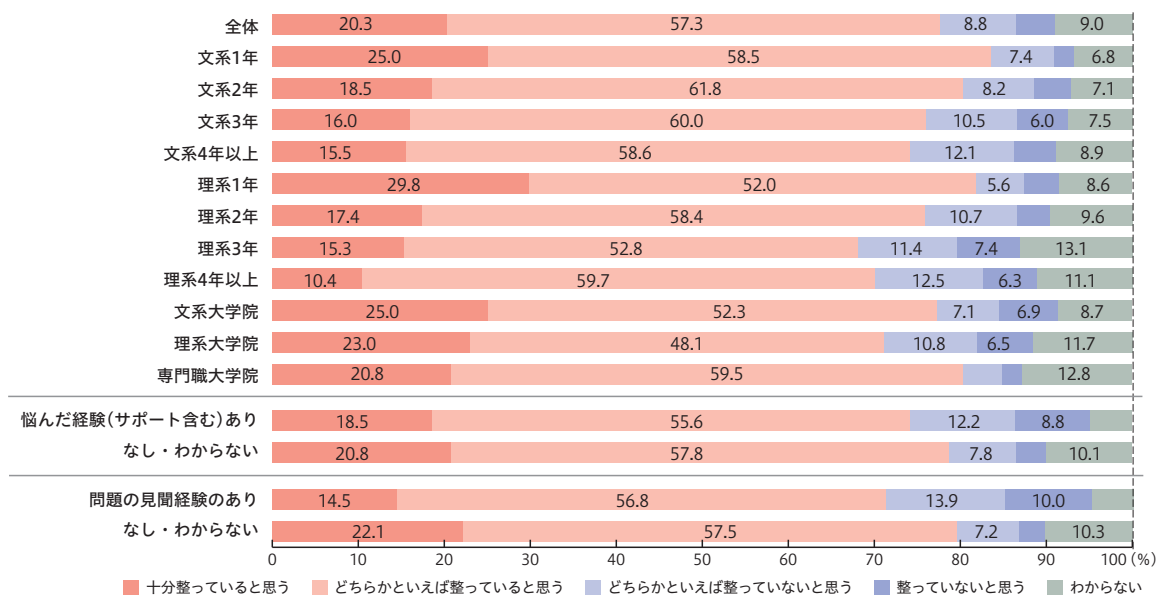


図25 本学のダイバーシティ受け入れ体制の評価